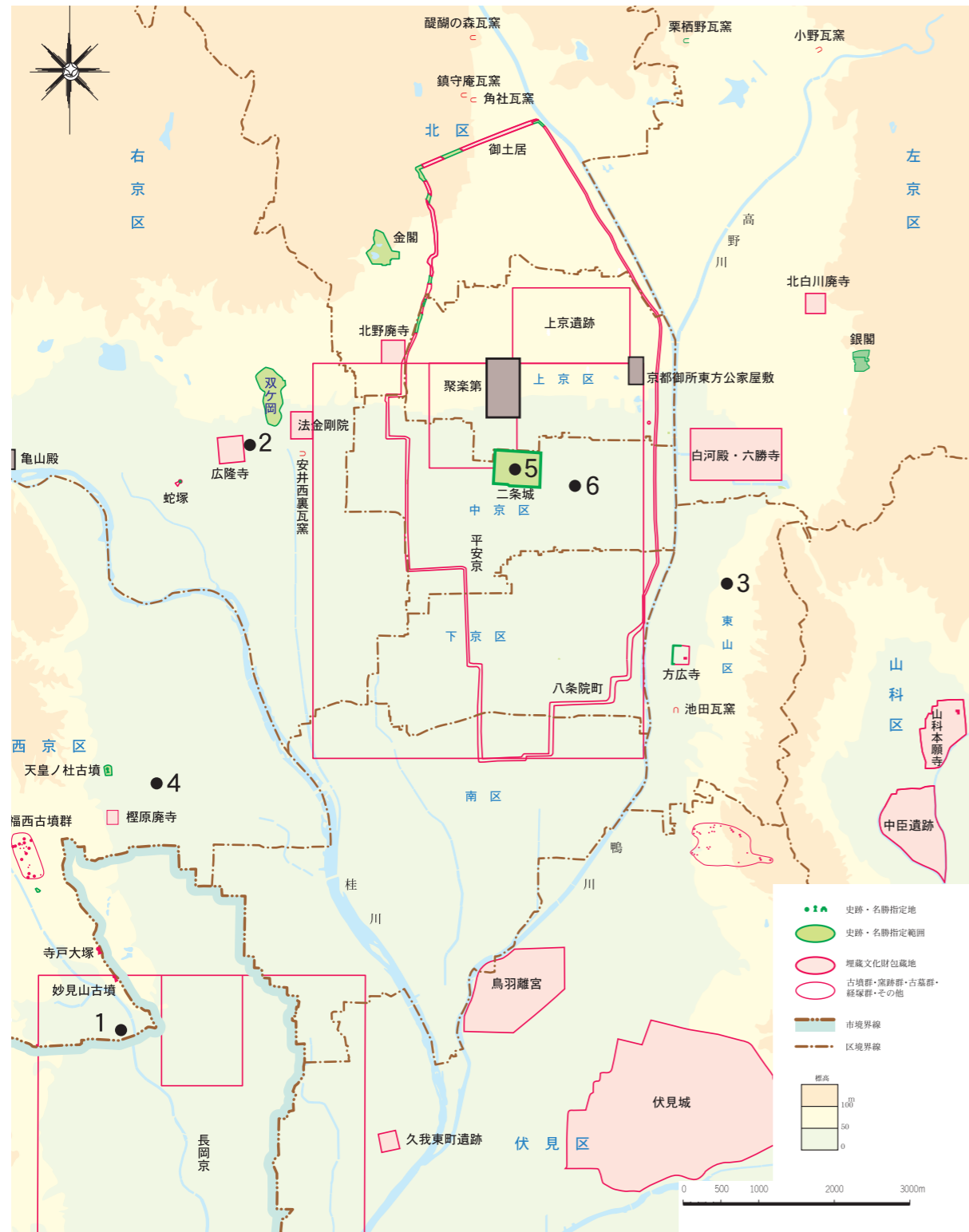


発掘成果をふりかえって 2009

調査名

- 1、上里遺跡
- 2、常盤仲之町遺跡
- 3、史跡法観寺境内出土埴仏
- 4、革嶋館跡
- 5、史跡旧二条離宮（二条城）
- 6、二条殿御池城跡



調査位置図（図番号は調査資料番号と共通）

上里遺跡（縄文時代晩期） 発掘調査現地説明会資料

2009年10月3日
 (財)京都市埋蔵文化財研究所
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

調査地：京都市西京区大原野上里南ノ町地内

調査期間：2009（平成21）年3月18日～10月30日（予定）

遺跡名：長岡京跡・上里遺跡（縄文～奈良時代）

調査面積：約2,240㎡

はじめに

この調査は京都市が計画する伏見・向日町線道路新設工事に先立って2001年度に西の方から調査を開始し、2003年度・2005～2007年度と順次東へ調査を進め、今回が最も東の端での調査となります。

今回の調査は今年3月から開始しました。調査区は段丘上のⅠ区と段丘下のⅡ区、2007年度の未調査区であるⅢ区を設定しました。これまでにⅡ・Ⅲ区の調査と、Ⅰ区の長岡京期と弥生時代前期の調査を終了しており、長岡京期では溝（一条大路南側溝）・築垣とみられる2列並行の柱穴、弥生時代前期では竪穴住居・土坑・柱穴群・炉跡などが見つかりました。Ⅱ区では長岡京期以前の遺構を確認することができませんでした。

調査成果

今回の調査で検出した縄文時代の遺構は、今からおよそ3,000年前にあたる縄文晩期前半のもので、2006・2007年の調査と同じ時期のものです。

Ⅰ区では、調査区の南半から北東にかけて自然地形と考えられる大きな落込み1155があり、その南側肩口を中心に散在した状態で多くの土器や石器が出土しました。土器には、煮炊きなどに使用したり盛り付けなどに使ったものがあり、完形に近いものが多く出土しています。調査区の北西では、土坑（849・1033・1079）や多数の柱穴、大きな土坑（848）などを確認しています。直径5cm以下の杭状のものには、まとまりが認められることから、建物の支柱や柵などになる可能性があります。また、調査区の西端では土器棺墓が少なくとも2基見つかっています（土器棺墓740・1202）。

調査の終了したⅢ区では、2007年度調査で検出した溝1215の続き（溝3263）や、この溝の底で西から南東へ続く溝3274を検出しました。これらの堆積土からは土器や石器、炭化物が多量に出土しています。さらに、溝3274の底では、流れ方向に直交して板状のものを立てた痕跡（土坑3288）を確認しました。また、Ⅲ区の東端では、土坑3266があり、この西端部分から多量のサヌカイト（石材）の破片が出土しました。石器を製作した場所である可能性があります。

まとめ

2006年度から縄文時代晩期の集落遺跡を調査した結果、集落の土地利用状況が明らかになってきました。2006年度調査区は竪穴住居と土器棺墓があることから居住域と墓域が隣接していたことがうかがえます。2007年度調査区は溝1215・1067の南側に土器棺墓や土坑がたくさんつくられていることから、溝の南側から今年度調査区の南西部分に墓域が形成

されたようです。溝の間の空閑地は土坑3266のような遺構の存在から、作業場所として利用されていた可能性もあります。今年度調査区北西には、柱穴が多数あることや焼土面が見られることから西側とは別の居住域と考えられます。自然の落込み1155を村の境界と意識していたのでしょうか。

落込み1155における南側の肩口から底にかけての土器の出土状況は、2007年度の溝1215の遺物出土状況とよく似ています。つまり、居住域の側から、壊れた土器や石器破片など日常生活における不要物が捨てられ堆積したものとみられます。このことから、今回の調査区の南側にもさらに別の集落（居住域）が広がっていた可能性が考えられます。

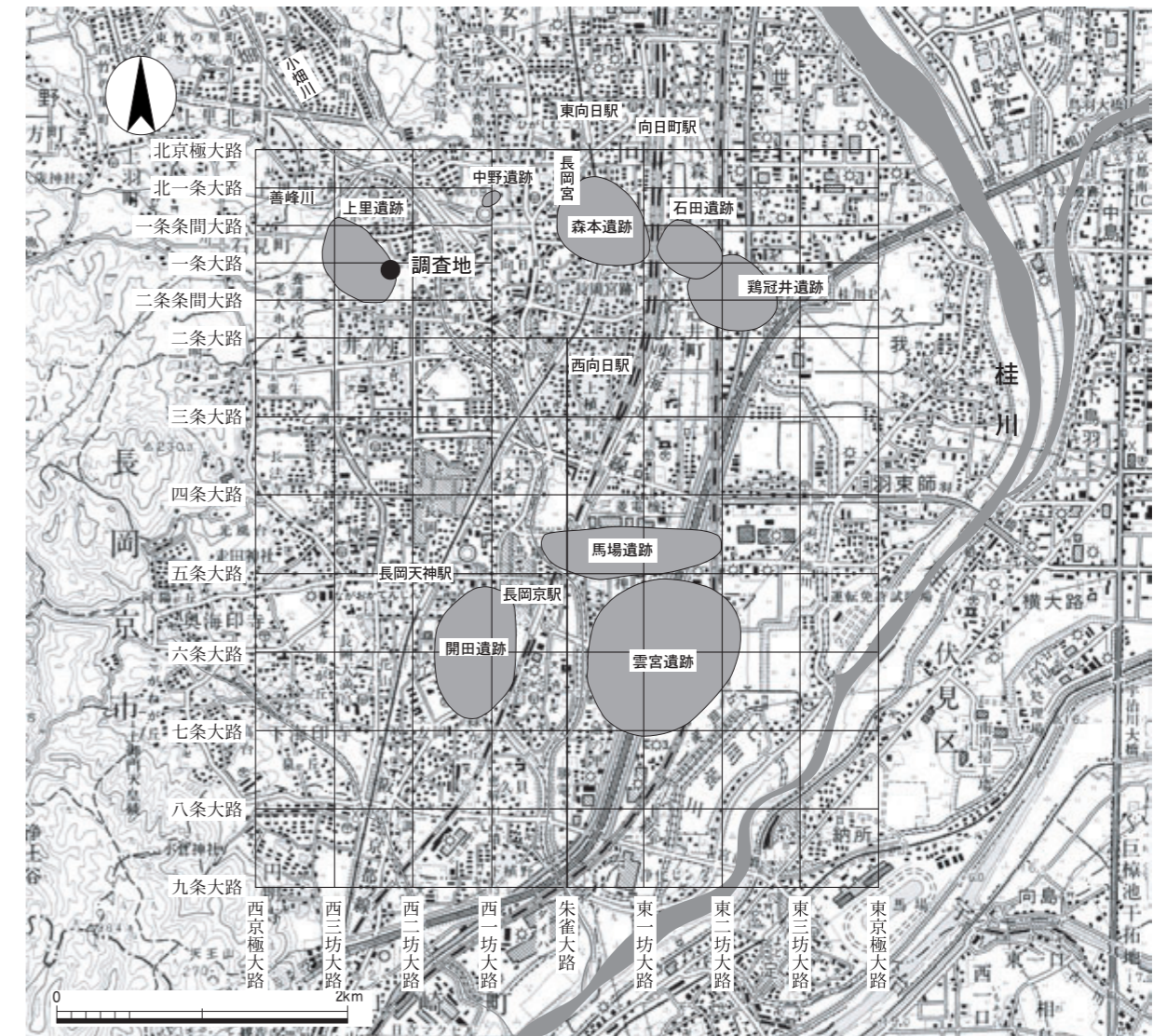


図1 調査位置図

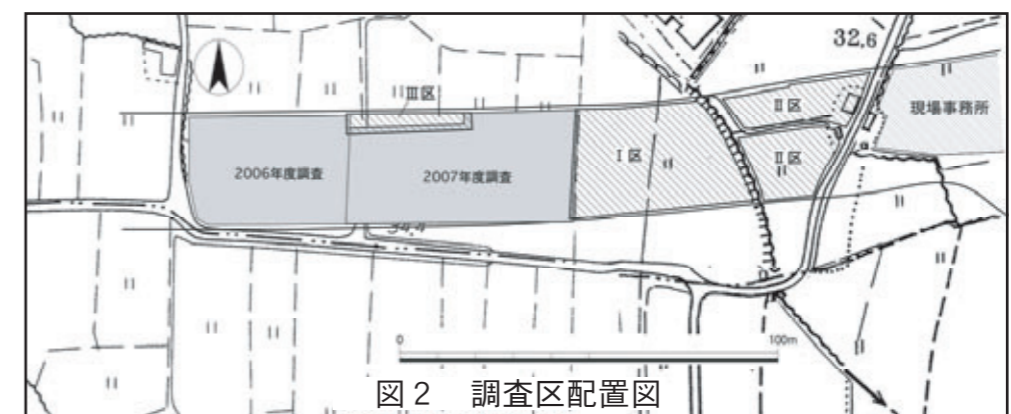


図2 調査区配置図

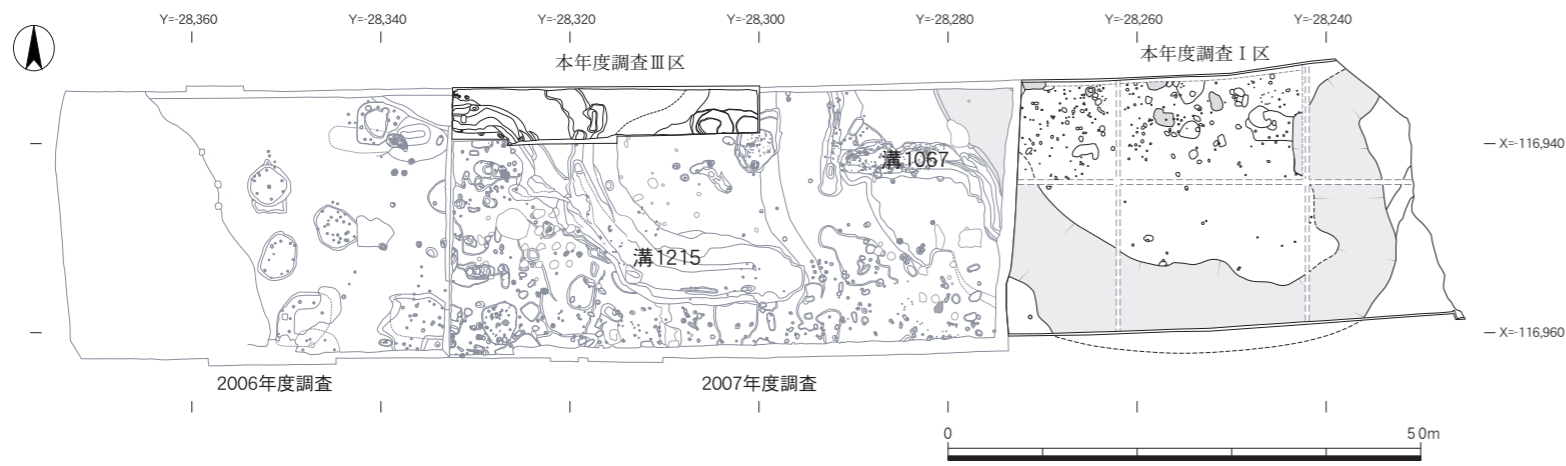


図3 2006・2007年度と本年度縄文時代晩期遺構図(1/800)

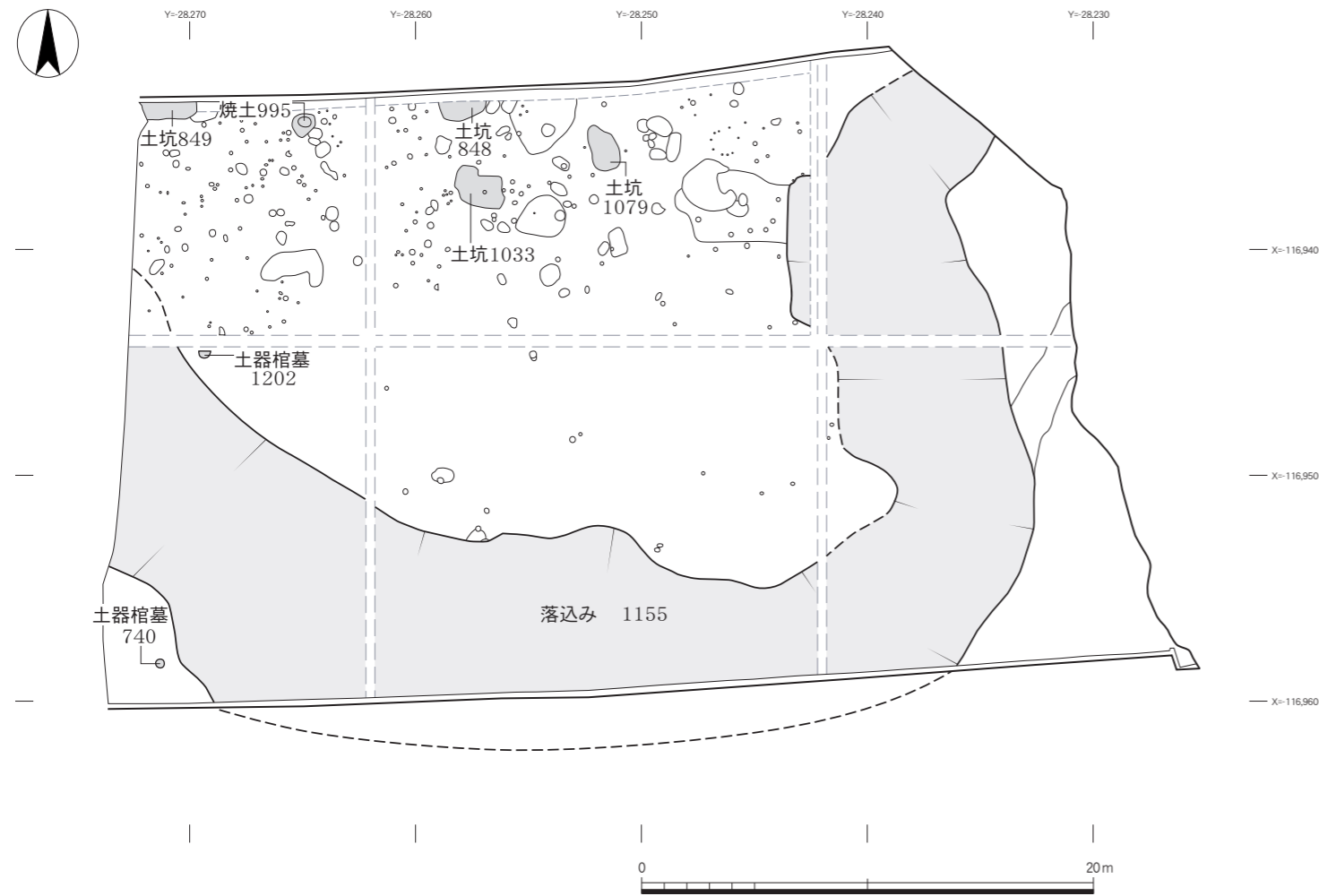


図4 本年度I区縄文時代晩期遺構略図(1/300)

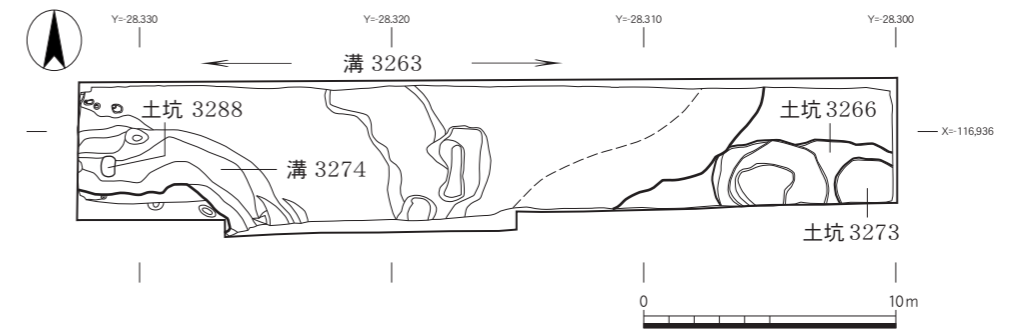


図5 本年度III区縄文時代晩期遺構図(1/300)



写真1 III区全景(南西から)



写真3 土坑3288(南から)



写真2 溝3274遺物出土状況(東から)



写真4 土坑3266(東から、手前は土坑3273)

上里遺跡（弥生時代前期） 発掘調査現地説明会資料

2009年7月18日
(財)京都市埋蔵文化財研究所

調査地：京都市西京区大原野上里南ノ町地内

調査期間：2009（平成21）年3月18日～10月30日（予定）

調査面積：約2240㎡

はじめに

この調査は京都市が計画する伏見・向日町線道路新設工事に先立って2001年度に西の方から調査を開始し、2003年度・2005～2007年度と順次東へ調査を進め、今回が最も東の端での調査となります。

今年度の調査は4月から開始しました。これまでに長岡京期の調査を終えて、現在弥生時代前期の遺構の調査を行っています。調査区はⅠ区・Ⅱ区と2007年度の未調査区Ⅲ区を設定しました。

これまで2006年度の調査では土坑・土器棺墓・溝・柱穴群・炉跡など、2007年度の調査では竪穴住居・土坑・土器棺墓・溝・柱穴群・炉跡など弥生時代前期の遺構が見つかります。

調査成果

今回の調査区のうち、段丘下のⅡ区は小畑川・善峰川による河川堆積層とその上に近世以降の耕作層を確認したのみで、長岡京や上里遺跡に関連する遺構・遺物は見つかりませんでした。

段丘上のⅠ区では弥生時代前期（今からおよそ2,500年前）の遺構がたくさん見つかりました。竪穴住居、土坑、土器棺墓、溝、炉跡、柱穴群などがあります。竪穴住居は少なくとも

3棟ありますが、この他に現在調査中ですが竪穴住居と考えられる大型の土坑もあります。土器棺墓は1基あり、上部はすでに削られて失われています。炉跡と考えられる焼土の痕跡は7箇所で見つっています。これらが住居に伴うものか、伴わないものかは検討が必要ですが、いずれにしても土器を据えて煮炊きした痕跡だと考えられます。柱穴は多数検出されています。直線的に並ぶ柵状のものや円形にまとまるものがいくつかあって、何らかの建物を構成すると考えられます。

まとめ

乙訓地域では、弥生時代前期の遺跡として長岡京市の雲宮遺跡や向日市の鶏冠井遺跡・森本遺跡などが知られていますが、住居跡を含む集落跡が明らかになった例はあまりありません。弥生時代前期といえば、稲作が導入された時期であり、この乙訓地域でどのように新たな文化が受け入れられたかを考えるうえで重要な成果と言えます。



図1 調査位置図

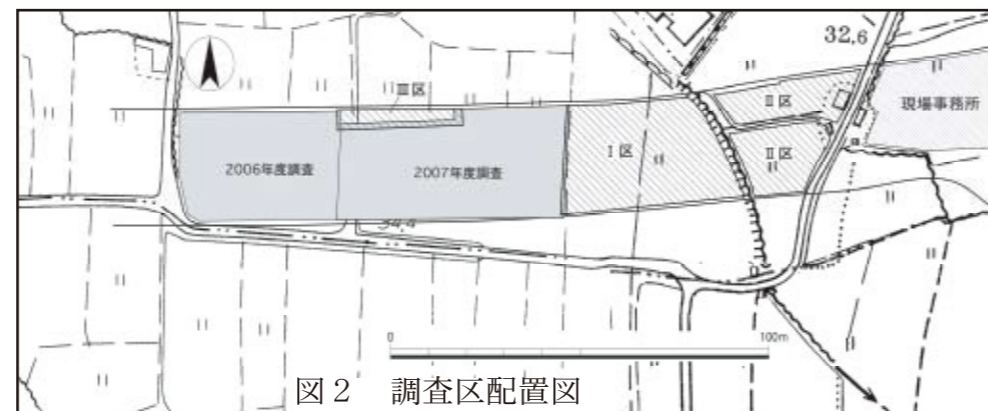


図2 調査区配置図

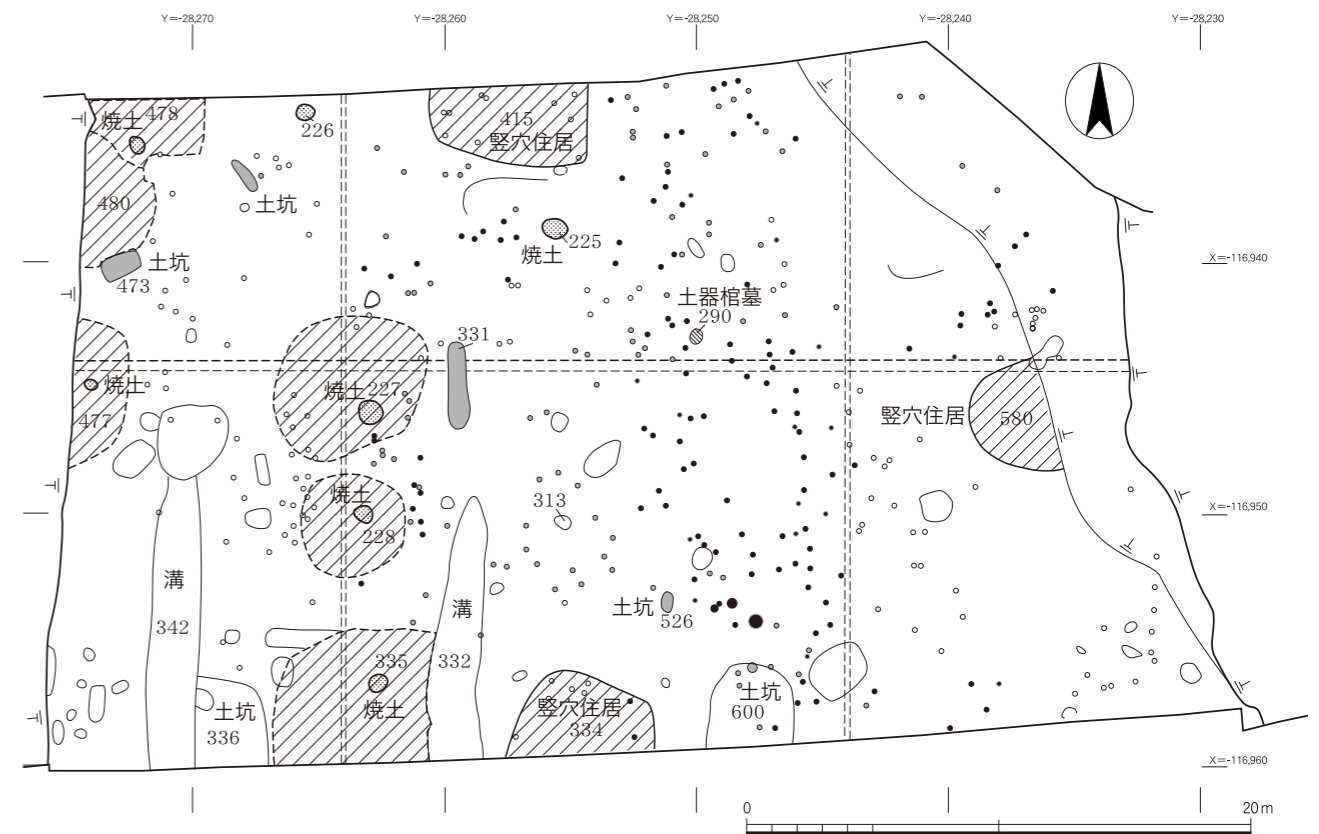


図3 本年度Ⅰ区弥生時代前期遺構略図(1/300)

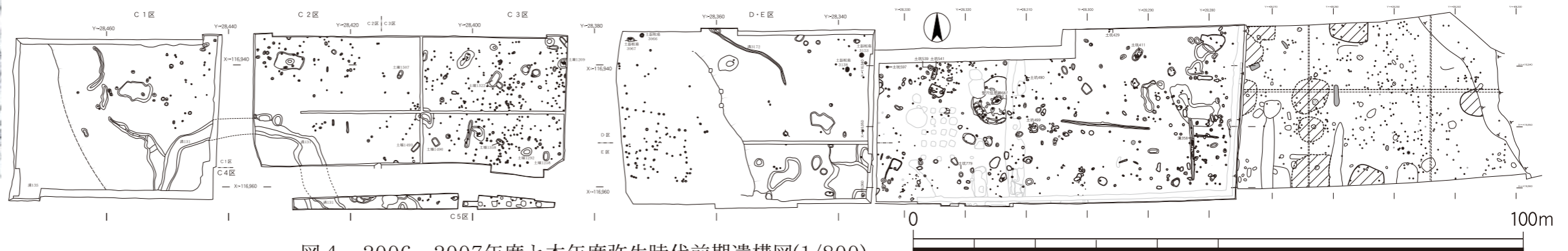


図4 2006・2007年度と本年度弥生時代前期遺構図(1/800)

平成22(2010)年2月27日(土)

ときわなかのまちいせき

常盤仲之町遺跡 現地公開資料

市道梅津太秦線(城北街道)立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

ざいだんほうじん きょうとし まいぞうぶんかざい けんきゅうしょ
財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
http://www.kyoto-arc.or.jp/

- 1 所在地 京都市右京区太秦東蜂岡町地内
- 2 調査期間 平成21年12月14日～平成22年3月12日(予定)
- 3 調査面積 約950㎡
- 4 調査目的 調査地点は、常盤仲之町遺跡や広隆寺旧境内遺跡に近接する地点に位置します。常盤仲之町遺跡は古墳時代後期から江戸時代にわたる遺跡です。

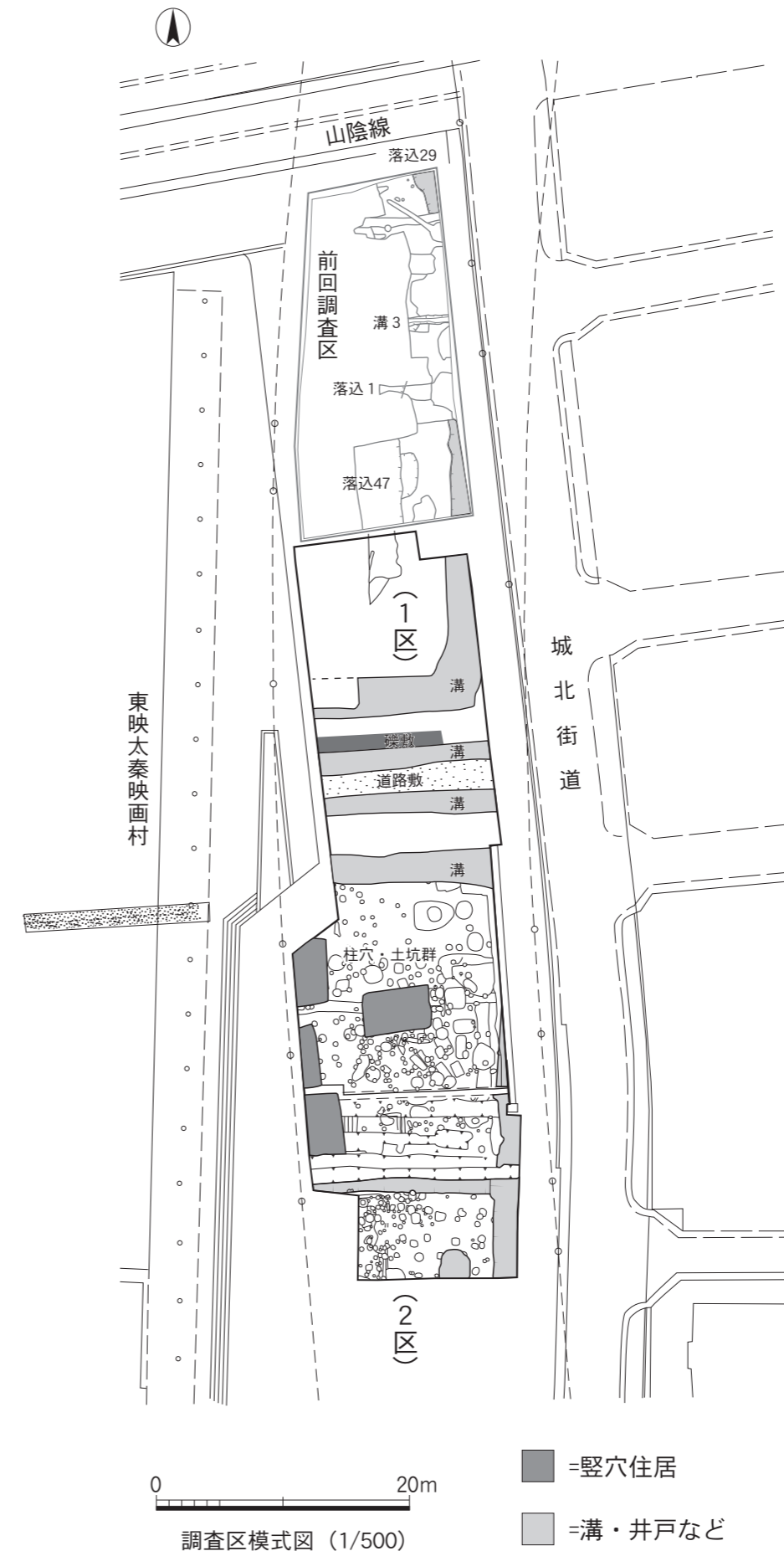
前回(2008年度)の発掘調査では、奈良時代の掘立柱建物、平安時代から中世にわたる遺物を含む土層、鎌倉時代から室町時代の道路側溝の可能性のある南北方向の溝などが検出されています。

今回の発掘調査では、上記遺構に関連する遺構や広隆寺旧境内に関連する遺構の検出を目的として調査を進めています。

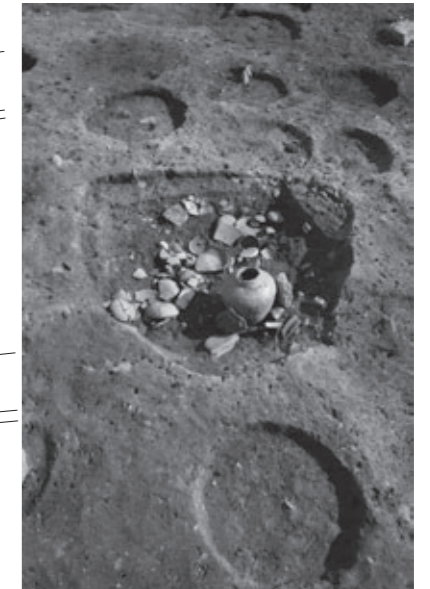
5 調査成果

今回の発掘調査においては、次の遺構や遺物がみついています。

- 主な遺構 : 飛鳥時代 竪穴住居跡
 平安時代 区画を示す施設・道路・溝、建物、井戸、土坑跡など
 鎌倉時代～室町時代 区画を示す溝・建物・土坑跡など
- 主な遺物 : 飛鳥時代 土師器・須恵器
 平安時代 土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・輸入陶磁器・瓦など
 鎌倉時代～室町時代 土師器・瓦器・輸入陶磁器・焼締陶器・瓦など



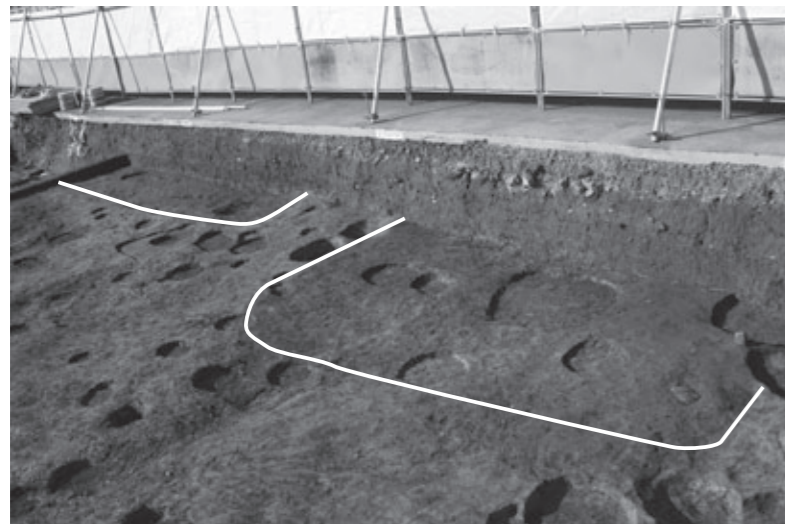
1区の全体写真
(平安時代 北から)



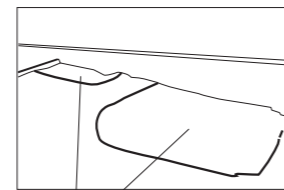
穴に納められた土器
(1区 鎌倉時代 西から)



2区の全体写真
(平安時代～室町時代北から)



竪穴住居を検出した状態 (北東から)



竪穴住居

史跡法観寺境内出土遺物（埴仏） 広報発表資料

2009年9月18日

遺跡名：史跡法観寺境内

調査地：京都市東山区清水八坂上町

調査主体：財団法人京都市埋蔵文化財研究所

調査期間：2009年8月～2009年12月（予定）

調査の概要：法観寺（霊応山法観禅寺）は東山麓、高台寺と清水寺の間に位置する寺院です。創建は白鳳時代以前に遡り、古代においては「八坂寺」と称され、愛宕郡八坂郷を本拠とした豪族、狛人八坂造が造営に関わったと考えられています。境内の五重塔は、通称「八坂の塔」と呼ばれ、現在も創建期の塔心礎の上に建ち、往時の姿を髣髴とさせています。塔は、治承3年（1179）、正応4年（1291）、永享8年（1436）に焼失していますが、その都度再建され、現在の塔は、永享12年（1440）に足利義教により再興されたもので、国の重要文化財に指定されています。

今回、この五重塔の南側で、防災工事に伴う発掘調査を実施しました。調査では、一度目の再建時のものと考えられる平安時代末期頃の溝が見つかりました。溝は塔基壇に平行しており、塔の雨水処理の施設と考えています。また、この溝の北側で、塔基壇からは南に約2mの場所から今回報告する埴仏が出土しました。

出土埴仏：今回出土した埴仏は、上部が尖った埴面に半肉彫りの三尊像を配置した「火頭形三尊埴仏」と呼ばれるものです。三尊のうち左脇侍の部分が出土し、残存長は縦9cm、横5cmあります。表面には部分的に漆と金箔が残っていました。同形の埴仏は、近畿地方を中心に出土しています(図5)が、これらの祖形となった埴仏が、中国西安市の大慈恩寺大雁塔周辺で多数出土しています。これが直接日本へ伝わり、日本での埴仏製作の契機の一つとなったと考えられています。この埴仏の日本への請来の契機としては、唐に渡り玄奘三蔵に師事した僧道昭が、經典や舍利とともに日本に持ち帰って広めたとの説が有力です。今回出土した埴仏は、文様の表出が鮮明であることや、中国出土のものに近いきめ細かな土が使用されていることなどから、日本への請来からまもない時期に製作された、最古級のものと考えられます。法観寺の調査では、7世紀第3四半世紀に位置付けられる軒瓦も出土しており、埴仏の日本での出現年代とも矛盾しません。

まとめ：法観寺境内から、日本でも最古級の埴仏が出土したことは、寺の創建が白鳳時代に遡るとの従来の見解の裏付けになるとともに、日本での仏教文化の広がりを知る上でも、大きな意味を持つと考えられます。現在でも京都を代表するランドマークのひとつとして親しまれる「八坂の塔」から白鳳期の埴仏が出土したことは、京都の持つ歴史の奥深さを実感させられる意義深い発見といえます。

・用語説明

埴仏

仏・菩薩の姿を彫った凹型の范型に粘土を押し当てて文様を転写し、それを焼き固めたもの。多くは表面に金銀箔や彩色を施す。日本では7世紀後半に出現し、8世紀前半まで盛んに製作された。多くは寺院跡から出土し、堂塔内の装飾や、念持仏として使用されたと考えられている。

踏み返し

最初の范型から作られた製品を原型として粘土に押し当て、もうひとつの型を作る。粘土は焼成すると収縮するため、踏み返しの范型により製作されたものは、最初の范型から製作されたものより小さくなる。また、踏み返しを繰り返すことにより文様の表出も次第に粗雑となることから、同形の埴仏でも前後関係のある程度把握することが可能となる。

道昭（どうしょう 629～700） 舒明天皇元年（629）河内国丹比郡に生まれる。俗姓は船連。孝徳天皇4年（653）遣唐使に随行して入唐。長安の大慈恩寺の玄奘三蔵に師事し、法相唯識を学んだ。斉明天皇7年（661）に帰国する際、三蔵は舍利と経論をことごとく道昭に預けたといわれる。帰国後は元興寺（飛鳥寺）の東南隅に禅院を建てて住んだ。広く全国を周遊し社会事業を行い、宇治橋造営にも関わったとされる。遺命により、日本で初めて火葬された人物としても知られる。

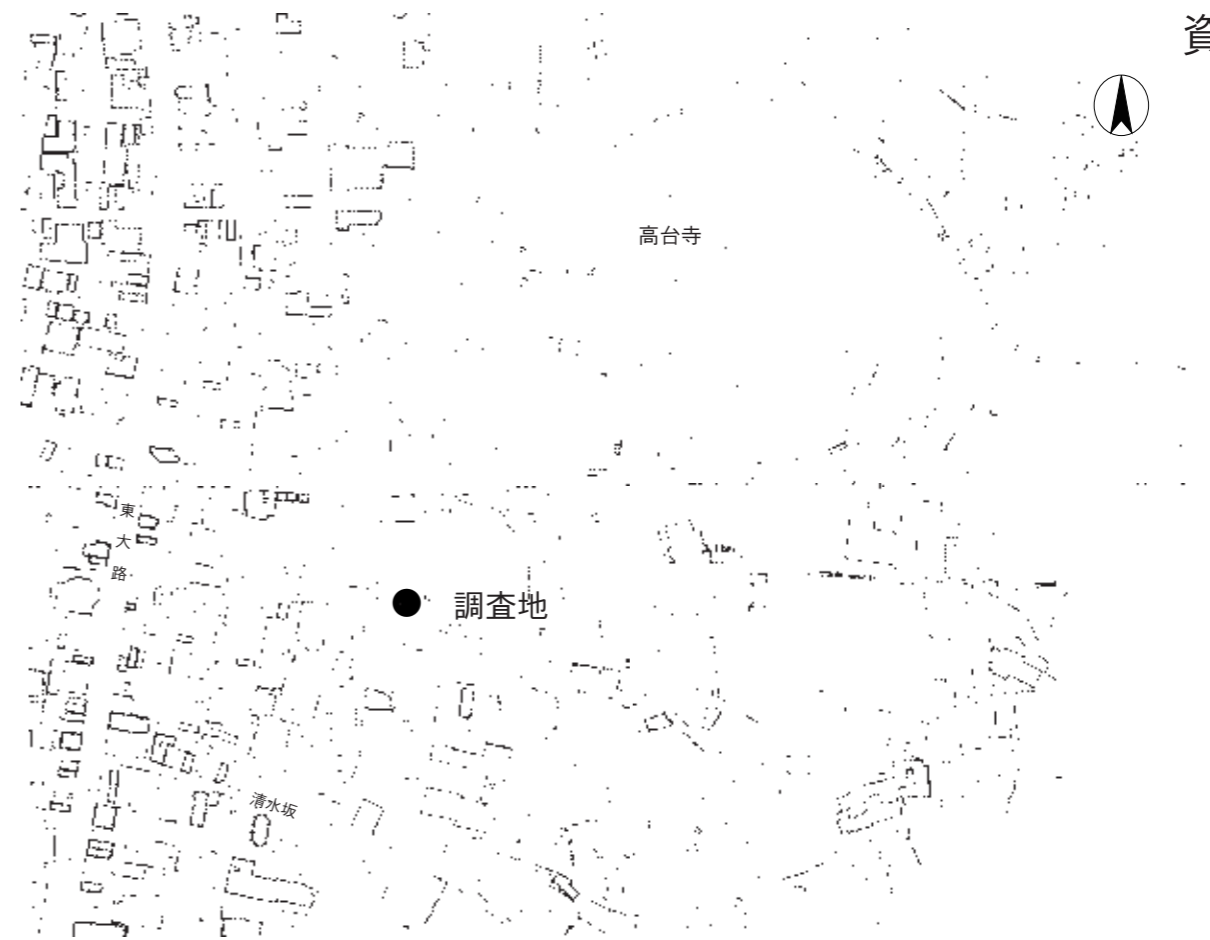


図1 調査位置図

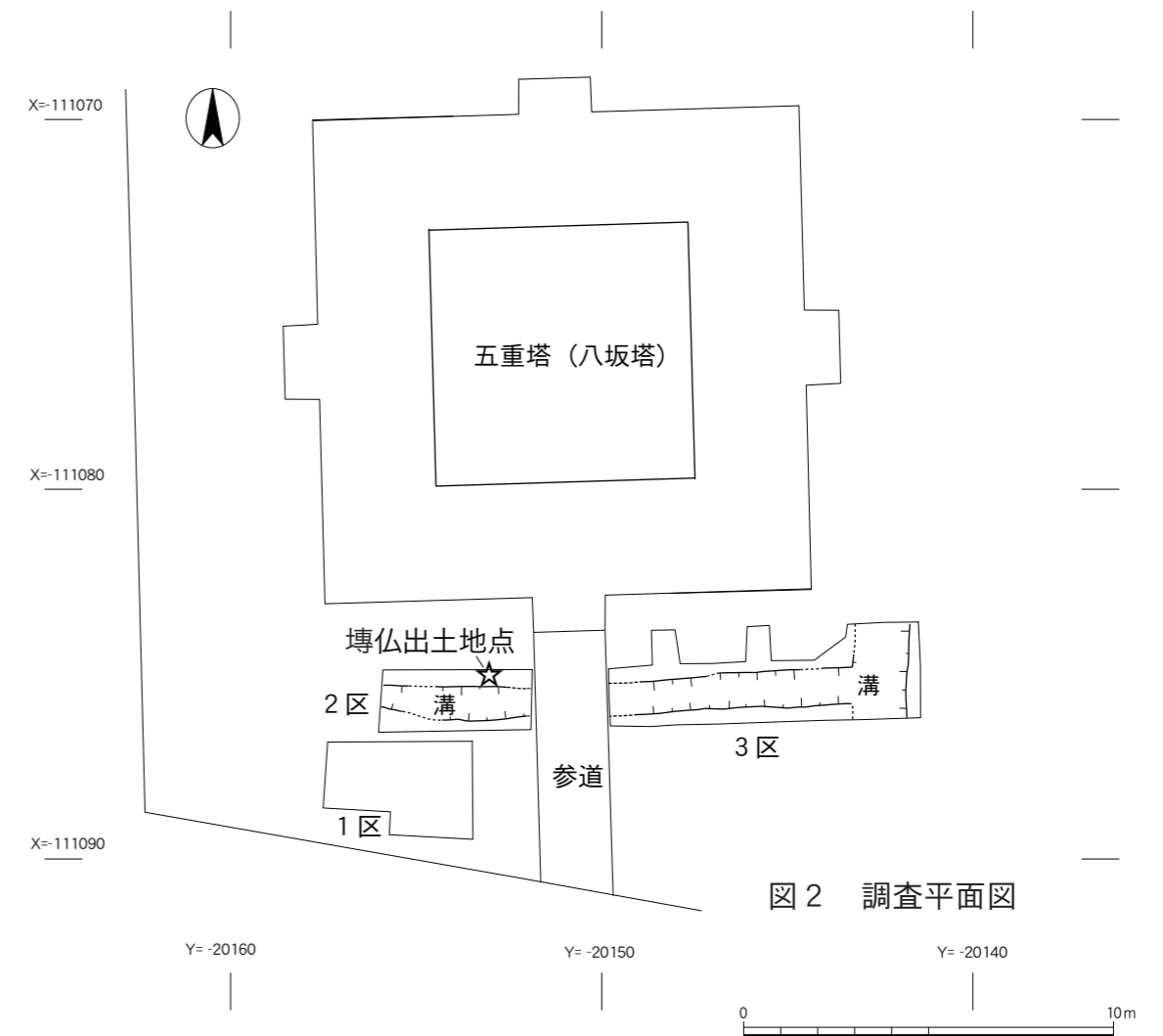


図2 調査平面図

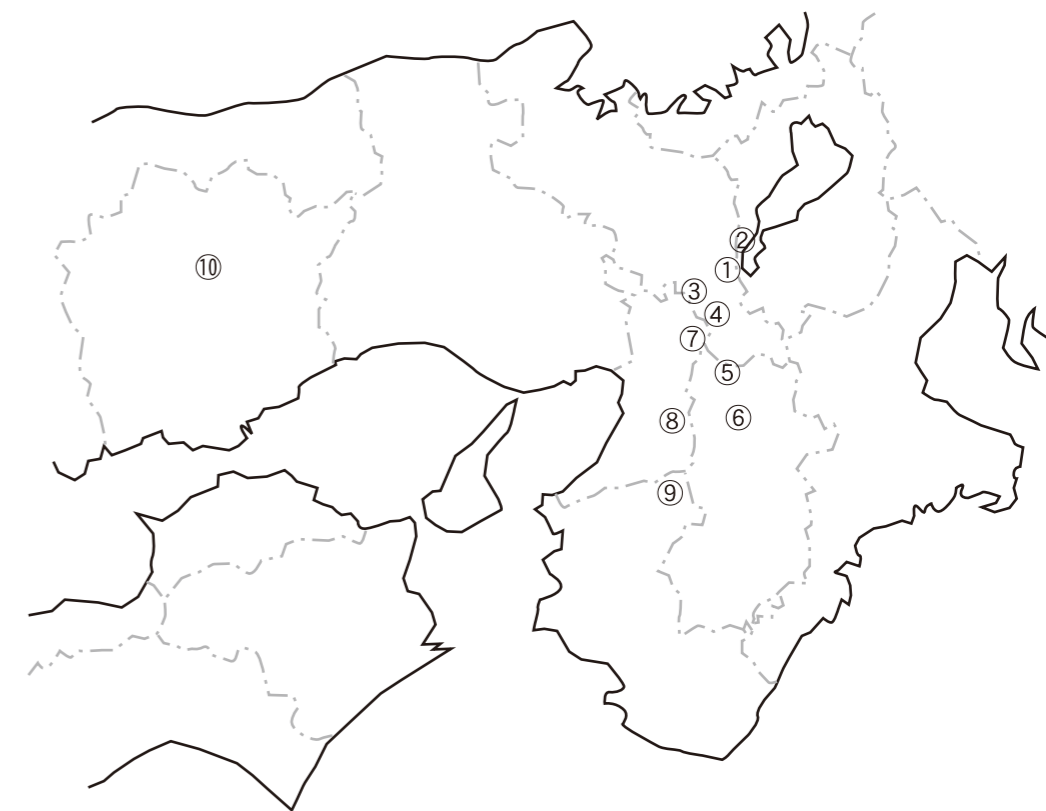


図3 阿弥陀谷廃寺(奈良市敷島町)出土火頭形三尊磚仏写真

奈良県立橿原考古学研究所附属博物館蔵

たて15.9cm 表面・側面に金箔
 よこ10.7cm 裏面にも金箔の接着剤の漆が残存
 厚さ4.1cm(底)
 1.7cm(上部)

図4 法観寺出土磚仏実測図



| | 遺跡名 | 所在地 | 点数 | 出土位置他 |
|---|----------|---------|----|------------|
| ① | 法観寺 | 京都府京都市 | 1 | 塔周辺整地層 |
| ② | 穴太廃寺 | 滋賀県大津市 | 1 | 再建講堂須弥壇東寄り |
| ③ | 山城国府跡 | 京都府大山崎町 | 8 | 山崎廃寺関連か |
| ④ | 西山廃寺 | 京都府八幡市 | 1 | |
| ⑤ | 阿弥陀谷廃寺 | 奈良県奈良市 | 1 | 礎石建物中央部 |
| ⑥ | 橋寺 | 奈良県明日香村 | 1 | 范型 |
| ⑦ | 獅子窟寺裏山遺跡 | 大阪府交野市 | 1 | |
| ⑧ | 河内鳥坂寺 | 大阪府柏原市 | 2 | 講堂北側 |
| ⑨ | 神野々廃寺 | 和歌山県橋本市 | 1 | |
| ⑩ | 久米廃寺 | 岡山県津山市 | 1 | 塔・金堂周辺 |

図5 同型火頭形三尊磚仏出土地一覽

「山城国府跡第54次(7XYS UD-4地区)発掘調査報告」
 『大山崎町埋蔵文化財調査報告書 第25集』
 平成15年(2003)3月24日 を参照して作成

革嶋館跡現地公開資料

2009年9月26日

所在地 京都市西京区川島玉頭町

調査期間 2009年8月31日～2009年9月30日（予定）

調査面積 約350㎡

調査機関 （財）京都市埋蔵文化財研究所

はじめに 宅地造成工事に伴う京都市文化財保護課の試掘調査によって中世の堀、土坑などの遺構が見つかったため発掘調査を実施しました。対象地は、山城国葛野郡革嶋荘の領主革嶋氏が住んでいた館跡です。革嶋荘は平安時代末期は公家近衛家の荘園で、この管理を任されていた役人が革嶋氏です。当初ここには荘園経営の中心として荘務をつかさどる政所屋敷が設けられ、中世には館となり、さらに堀と土塁で防御する平城へと変遷したと考えられています。革嶋氏が鎌倉時代から代々残してきた『革嶋家文書』（京都府立総合資料館所蔵）の江戸時代中期の絵図には、革嶋春日神社を含む南の位置に、土塁と堀に囲まれた館跡が描かれています。今回の調査地は、東側の堀と土塁が示されている館跡の南東の一角にあたります。

調査成果 調査区北側の現地表下 0.7m～0.8m で、南北方向の堀1を発見しました。堀の時期は室町時代後期から江戸時代で、規模は幅約5m、深さ2mで、さらに調査区外に延びています。また、堀1から約7.5m東にも南北方向の堀2が残っていることがわかりました。堀2は幅4m以上、深さ1.6m～1.8mで、東肩部は調査区外に延びています。調査区南端で西に屈曲しており、調査区外の西約47mで行われた試掘調査において確認された南北方向の堀につながると考えられます。堀2は絵図に示された館の南東部の区画と考えられます。また堀1の西側には井戸3、集石遺構4、柵5、柱穴群などがみられ、館内の施設とみられます。

出土した遺物は、室町時代から江戸時代の土器類が中心ですが、堀2の埋土からは江戸時代の瓦類が数多く出土し、建物の軒先を飾る軒瓦もみられます。

その他に堀1の西側では館築造以前の古墳時代の土坑や溝状遺構が残っていました。堀2の南肩付近でも古墳時代の竪穴住居跡がみられ、さらに調査区外の南側では同工事に伴う立会調査で、古墳時代以前（住居2）と古墳時代（住居1）の竪穴住居跡を各々1棟確認しています。また、古墳時代の土器類も出土しています。

まとめ 堀2は、江戸時代の絵図に示された革嶋館の南半部の区画を示す外堀と考えられます。堀2と試掘調査で見つかった西側の南北堀との内幅は約47mです。土塁については堀1・2間に造作されていたと推定されますが、すでに削平されていました。堀1は内堀と考えられますが、調査区外の南側の状況が明確でないことなどから、今後の検討課題です。堀1西側の室町時代の井戸、集石遺構、柱穴などは、館内部の建物配置や施設の状況を考える上で重要な遺構です。

また、古墳時代の遺構や遺物は、館跡以前の当地一帯の開発時期を知る上で注目されます。

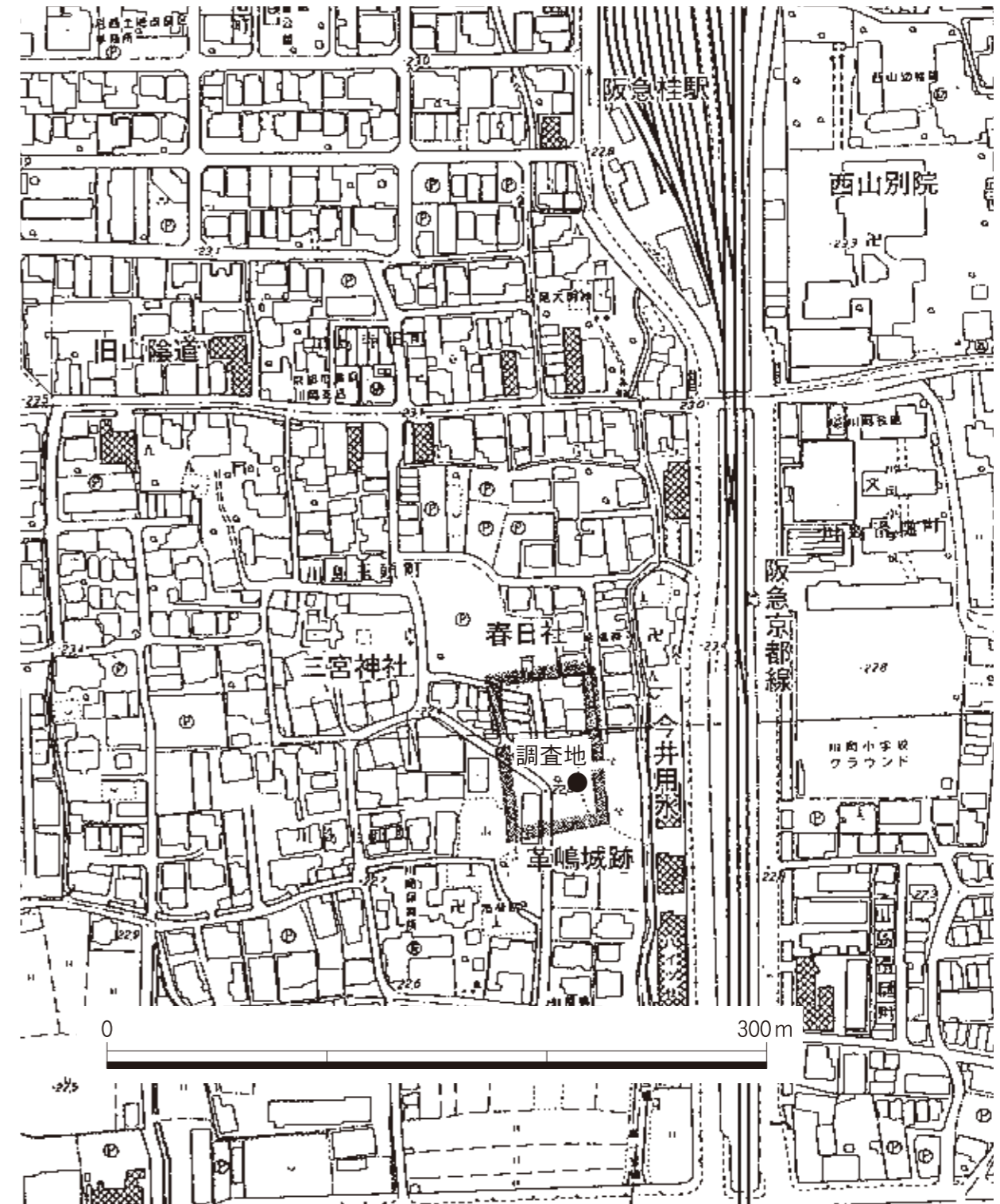


図1 調査区位置図

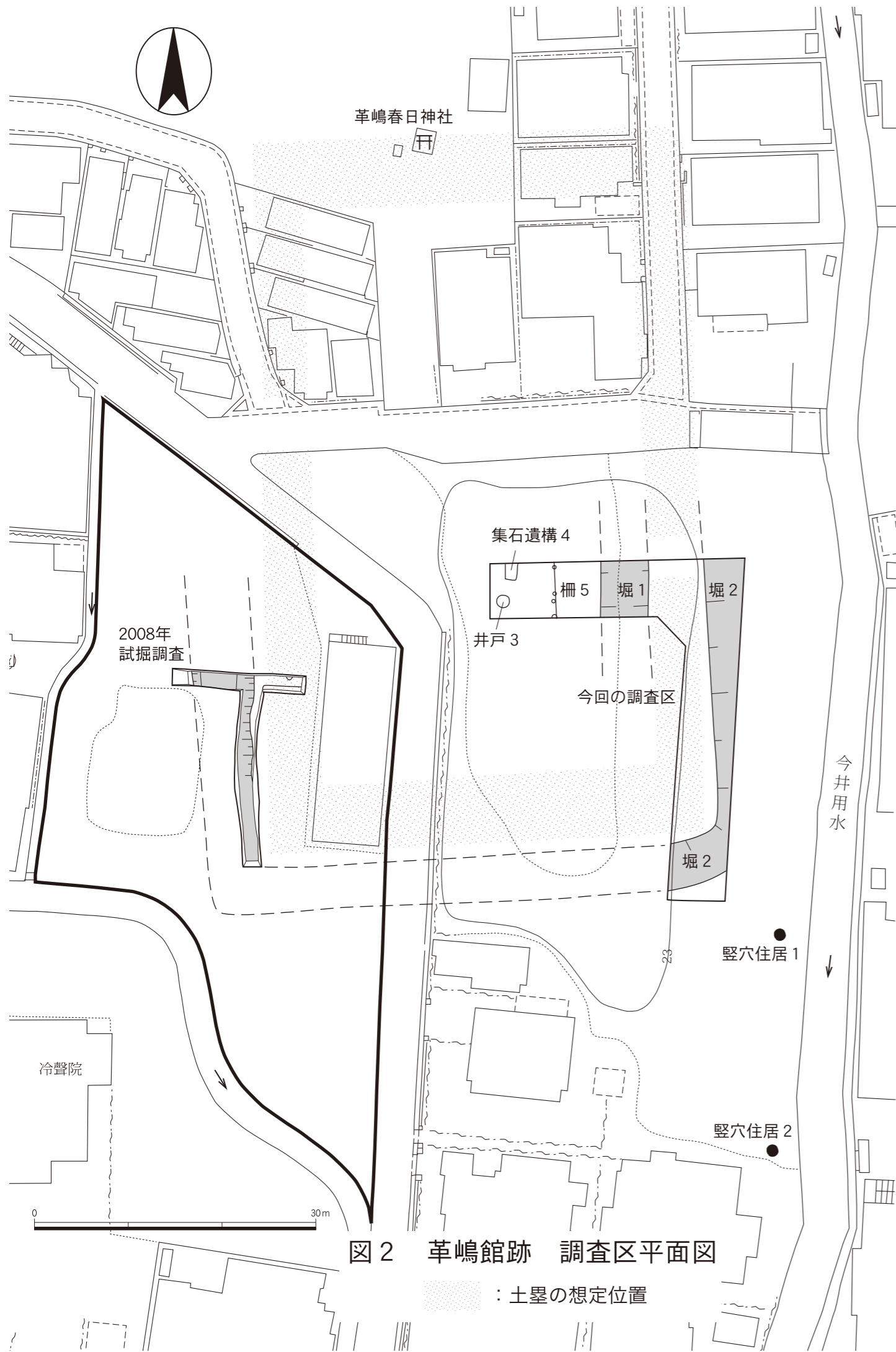


図2 革嶋館跡 調査区平面図

：土塁の想定位置

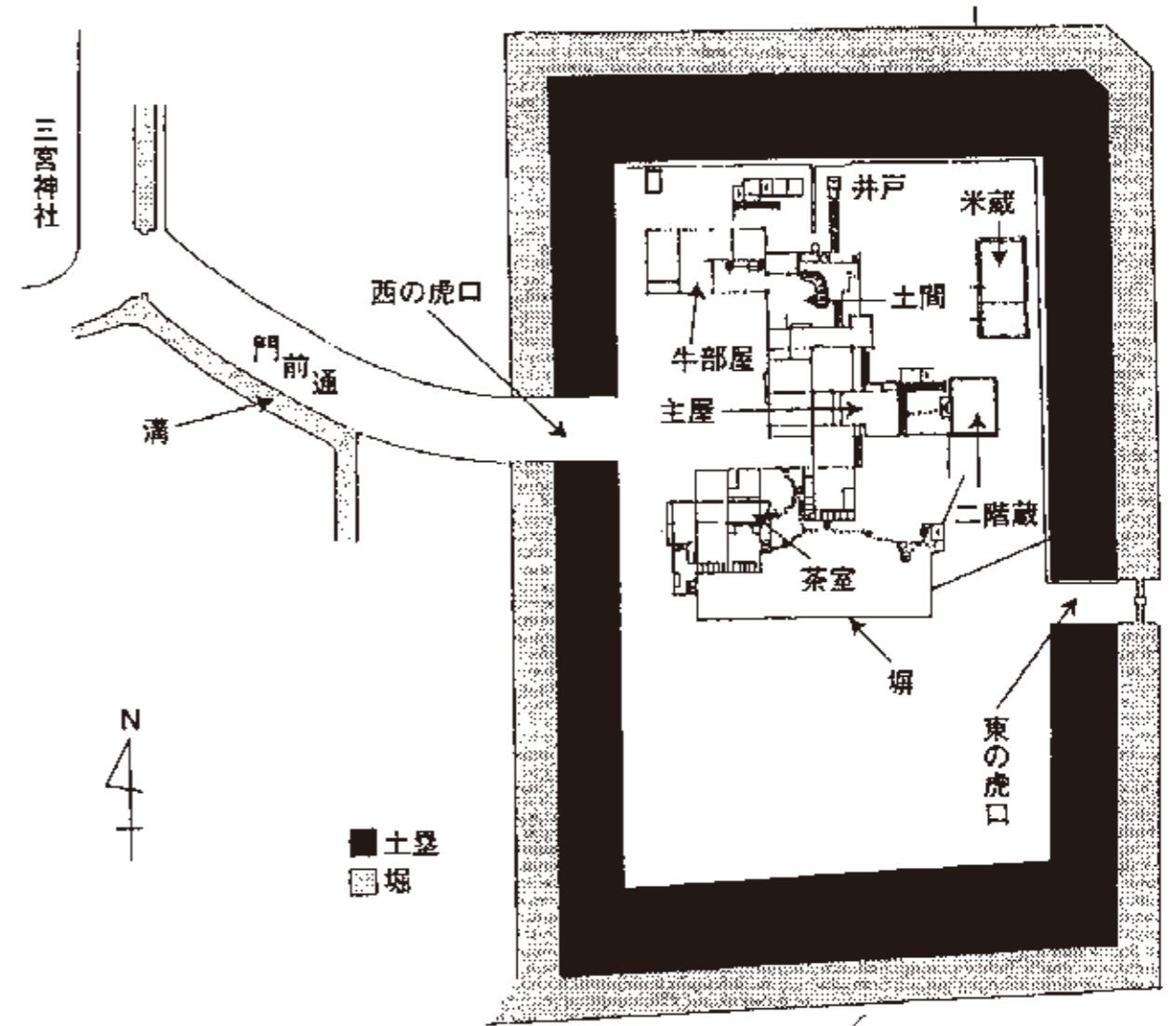


図3 革嶋館跡 (元禄15年 1702 頃の絵図『革嶋家文書』)

革嶋館跡地元説明会資料

2009年10月27日

所在地 京都市西京区川島玉頭町

調査期間 2009年10月5日～2009年10月30日（予定）

調査面積 約300㎡

調査機関 （財）京都市埋蔵文化財研究所

<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

はじめに 建築工事に伴う発掘調査を10月5日から実施しています。調査地は2008年に京都市文化財保護課の試掘調査によって、南北方向の堀が確認されています。

当地は、山城国葛野郡革嶋荘を本拠とする領主革嶋氏が住んでいた館跡です。革嶋荘は平安時代末期は公家の近衛家の荘園で、当初は荘園経営にかかわる、事務管理を行う政所屋敷があり、中世には館となり、堀と土塁で防御する平城と考えられています。革嶋氏が鎌倉時代から代々残してきた『革嶋家文書』（京都府立総合資料館所蔵）の江戸時代中期の絵図には、革嶋春日神社を含む南の位置に、土塁と堀に囲まれた館跡を示した場所が描かれており、今回の調査地は南側の西堀と土塁が示されている館の西南の一角に当たります。

館東南部については、9月の発掘調査（本年9月26日現地公開を実施）で明らかにし、絵図を裏付ける調査成果が得られました。今回の調査は館西南部の堀と土塁の状況および、館外西側の様相を確認することを目的に実施しました。

調査の成果 調査区東側の現地地表下約1.3mの面で南北方向の堀1を発見しました。堀の時期は室町時代後期から江戸時代で、規模は幅約5m、深さ約1.4mで、さらに調査区外の北に延び、試掘調査で確認された南北方向の堀につながります。堀1は館南半部の西の区画と考えられます。また、堀1から約5m西に南北方向の水路2があることもわかりました。水路2は幅2.6m、深さ0.8mで、調査区外北と南に延びています。さらに堀1に西接して室町時代の石組井戸3や土坑がみられます。また中世から近世の耕作に伴う小溝群などもみられ、館外西側の様子を知ることができました。

遺物は堀や井戸、溝などから出土した室町時代から江戸時代の土器類が中心ですが、古墳時代から平安時代の土器類もあります。

まとめ 堀1は、江戸時代の絵図に示された革嶋館の西側南半部を区画する堀と考えられます。堀1と前回の調査で見つかった東側の南北堀との内幅は東西約47mです。堀1は絵図から調査区外の南側で東に屈曲するとみられますが、残念ながら今回は確認できず今後の検討課題となりました。堀1西側の室町時代の井戸3や、室町時代から江戸時代の小溝群、そして明治時代の地籍図にも坪境溝として示される水路2などは、館外西側の状況を考えるうえで重要な遺構です。さらに古墳時代から平安時代の遺物は、当地一帯の開発状況の変遷を知る上で注目されます。

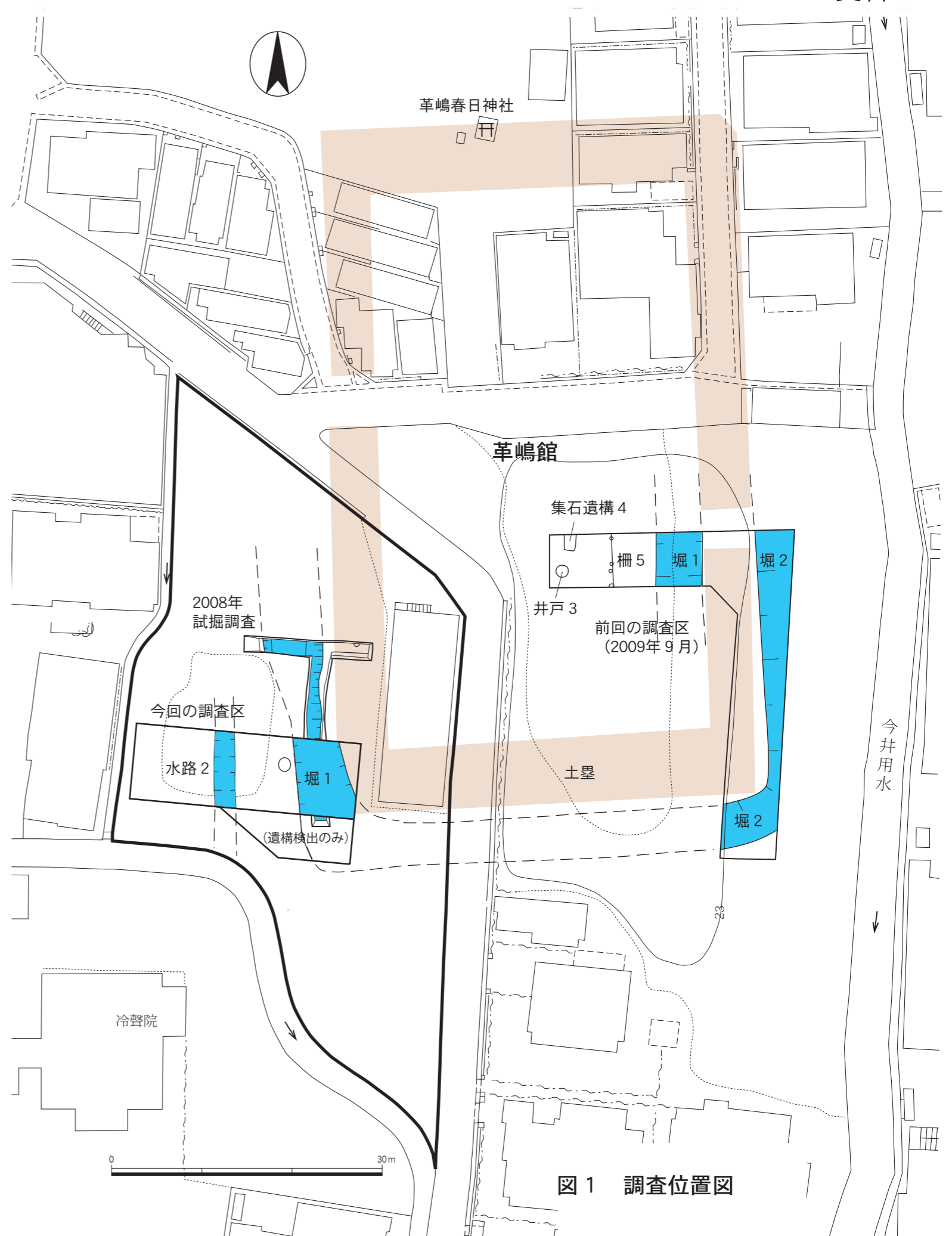


図1 調査位置図

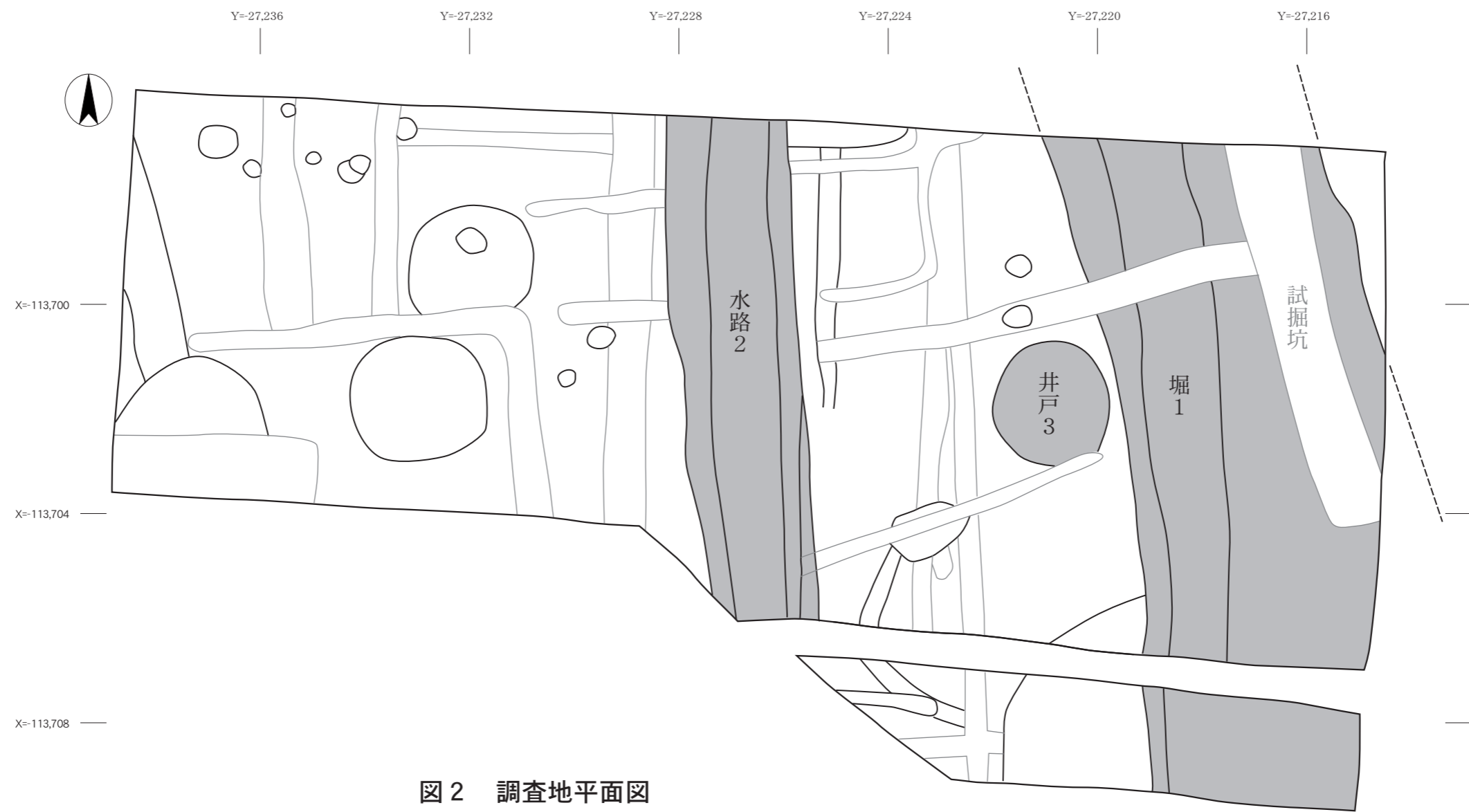


図 2 調査地平面図



史跡 旧二条離宮（二条城） 調査公開資料

平成 21 年（2009 年）11 月 16 日
元離宮二条城事務所・財団法人京都市埋蔵文化財研究所

遺跡の概要

現在の二条城は、徳川家康により慶長 7 年（1602）から築城が開始されました。その頃は二の丸御殿の位置を中心とする方形でしたが、徳川家光により寛永元年（1624）から西側への拡張や御殿の築造などの大規模な改修がなされ、現在のような二重の堀を備えた東西約 530m・南北約 410mにおよぶ城域をもつようになりました。寛永 3 年（1626）には後水尾天皇の行幸が行われています。また、慶応 3 年（1867）には徳川慶喜が二の丸御殿で大政奉還の諮問を行ったことでも知られています。

調査の経過

今回の調査は、防災工事に先だって二条城内南部「桜の園」で実施しています。調査地周辺の江戸時代の絵図には、後水尾天皇の行幸の際に、天皇・皇后・皇太后たちの御殿が築造された様子が描かれており、今回の調査地は御殿西側の台所に付属する部分にあたります。

調査は江戸時代後期・江戸時代中期・江戸時代前期に分けて行いました。

江戸時代後期

こぶし大の石を詰めた方形の穴、瓦を棄てた穴などが見つかりました。

江戸時代中期

石鳥居の台石、建物の礎石、方形の石組、石を詰めた溝、瓦や陶磁器を棄てた大規模な穴などが見つかりました。この頃には調査地南西隅あたりに稲荷社があり、石鳥居はその参道にあったと考えられます。文政地震（1830）で石鳥居が倒壊したという記録があります。

江戸時代前期

建物、溝、石列、柱穴、土坑、整地層などが見つかりました。建物は柱を立てた礎石、礎石を抜取った穴、礎石を据えた根石が東西・南北方向に並びます。溝は逆「コ」字形で建物の西側を囲みます。両側に石を並べる構造であったようです。石列は建物の基礎と考えられ大小の石材を東西方向に並べています。整地層は東側ほど分厚くなります。

これらの遺構は御殿の絵図と合致するところが多く、御殿西側の台所に付属する建物及び関連施設と考えられます。

出土した遺物

江戸時代の遺物が大部分を占め、多量の瓦や土器・陶磁器、金属製品が出土しています。瓦の多くは御殿の屋根に葺かれていたものです。中には金箔を貼った瓦もあります。金属製品には建具の引手などがあります。

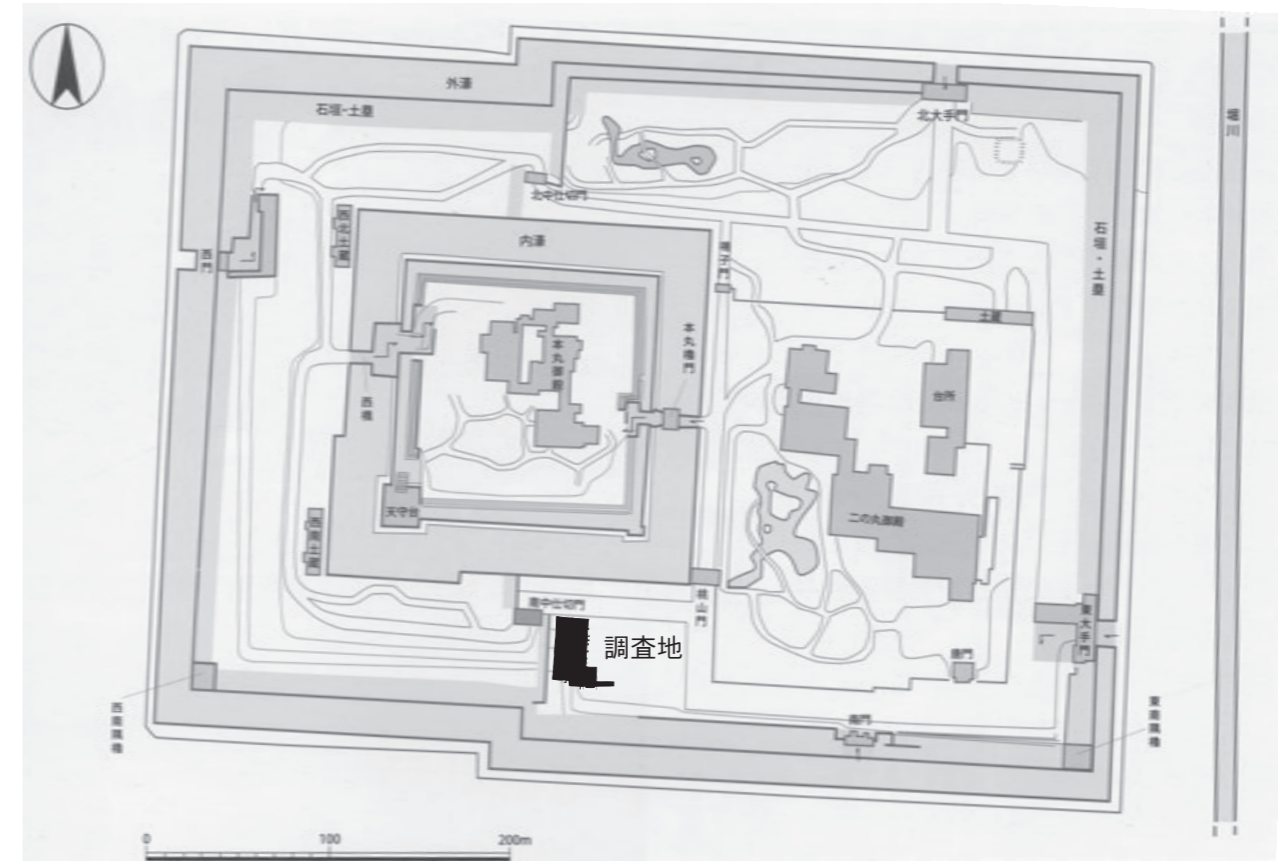


図 1 調査位置図



写真 1 調査地全景（北より）

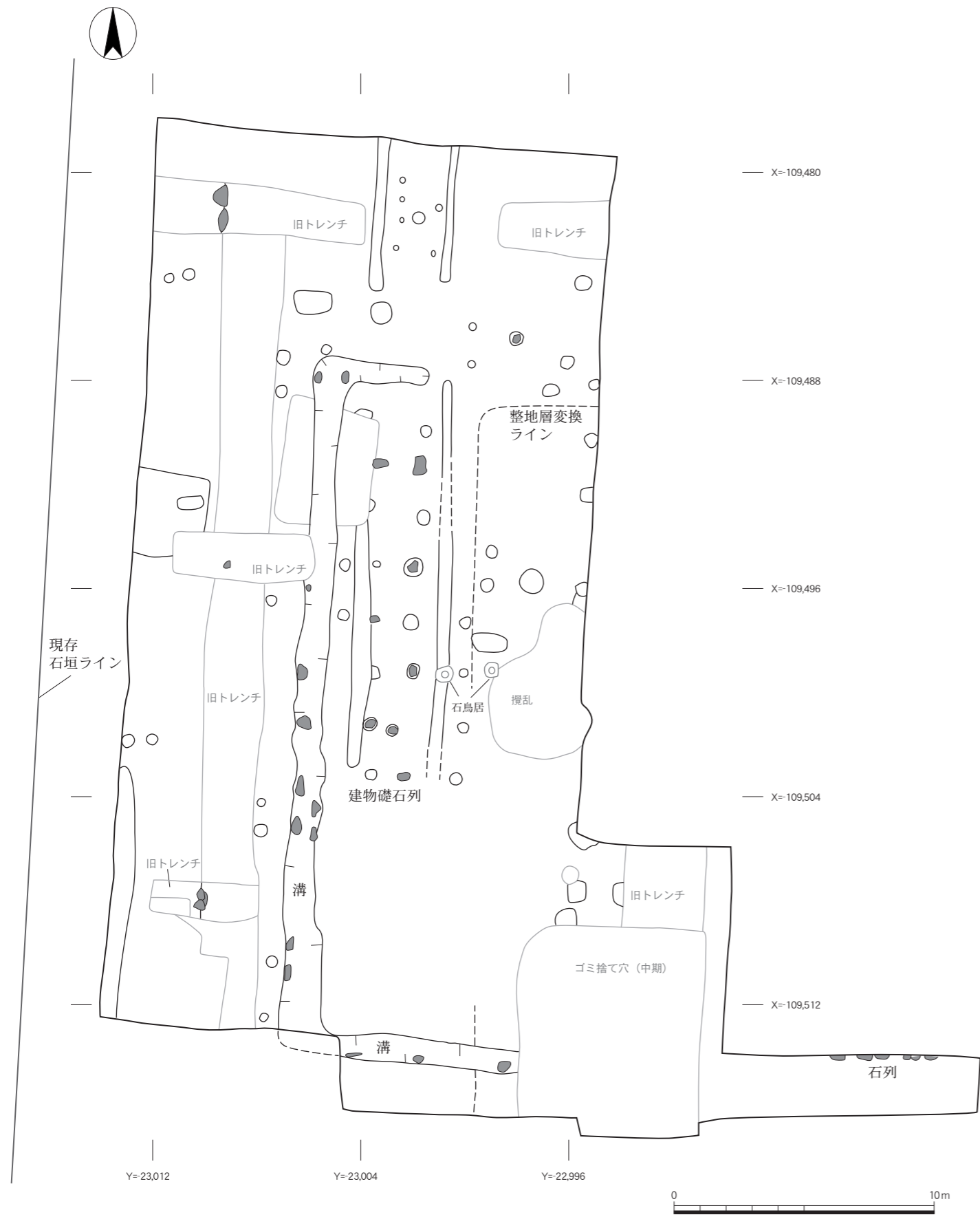


図2 桜の園 江戸時代前期遺構略測図 (1:200)

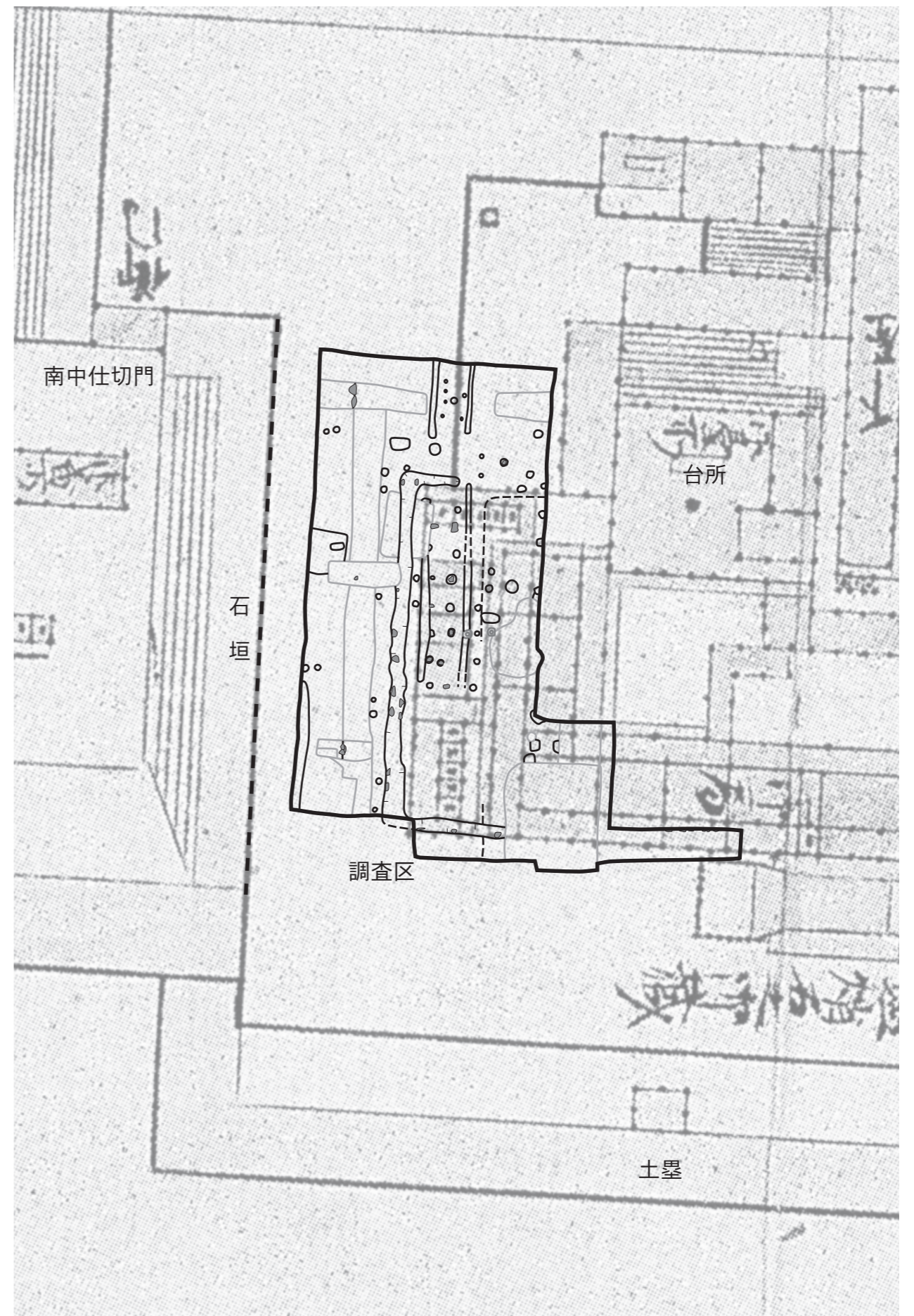


図3 検出遺構と絵図

「行幸御殿並古御建物御取解不相成以前二条御城中絵図」 中井正知家蔵に加筆